未来の山谷へ

過渡期を迎えているドヤ街

多くの日雇い労働者が暮らす町、山谷。だが、「山谷はあと10年でなくなるかも」という関係者の声がある。台東区は23区内で最も高齢化が進み、まさにドヤ（簡易旅館）街にこそ高齢者が濃縮されているからだ。建物の老朽化も迫る。外国人旅行者向けに建て替えたドヤもあるが、現実に今直面しているのは、独り身の行く末だ。そこへ数年前、山谷に身寄りのない末期患者のための施設、ホスピスが建てられた。限りなく家庭に近い温かな場所、『きぼうのいえ』だ。

取材・文：鳳鈴じゅんこ　撮影：鈴田憲司

きぼうのいえが別経営する介護ステーションハーモニーのベテランスタッフ。優しく言葉をかけながらのお世話は、実に手際よい。

東京タワーを造ったという85歳の入居者は、元とび職で溶接の火にやられて目が不自由。東京タワーの置物と皆からのお守りが宝物だ。

近所の食料品店にスタッフと一緒に買い物も、楽しみのひとつ。数人の入居者に住み心地を聞くと、照れくさそうに「まあまあだな」。

とうとう山谷にホスピスができた。

ここはある意味、日本社会の最前線だ。終戦直後の罹災者の収容を経て、高度成長期を縁の下で支える日雇い労働者が、3畳一間の簡易旅館・通称ドヤに住むようになり、混乱期には数々の闘争の舞台ともなった。安酒場やパチンコ店が点在するこの町で長く暮らすことを、「山谷育ち」「ヤマ暮らし」というそうだ。世の好・不景気は日雇い仕事の増減としてモロに影響し、現在は高齢化の波が押し寄せる。ドヤは今や、生活保護を受給する独居高齢者の住まいに様変わりしつつある。

そこに、人生の終焉を迎えるための施設が現れた。創設者はキリスト教の聖職者を目指したことのある山本雅基さんだ。「行き倒れた人を救うマザーテレサがインドに開いたような施設を」という一心で、看護師である妻の美恵さんと共に4年前に開設。病院でもなく、高額な利用料が必要な有料老人ホームでもない「身寄りがなく、行き場を失った余命に限りのある人たちのための家」だ。

山谷のドヤ暮らしの高齢者は大抵、最後は病院に入院する。住民票がなくて生活保護を受給できないホームレスは、ブルーシートのテントでさらに過酷な生活を強いられ、行き倒れる人もいた。

とはいえインドと違って実際に「路上に倒れている人をそのまま連れてくる」わけではない。日本の法律では、お金も身よりもなくて行き倒れた人は、救急車で病院に運ばれた時点で生活保護受給の対象になるからだ。だからまず病院へ。そして治療が一段落し、全快の見込みのない人がここ、山本さんたちのホスピス『きぼうのいえ』へ来る。テントへ戻らなくて済むのだ。

地元では、周りの人が良い誤解をしてくれる

この施設は、入居者の生活保護費と、山本さんたちの努力の末に寄せられる寄付、それとボランティアの方の尽力で運営が成り立っている。

きぼうのいえのコンセプトは「できるだけゴージャスに」。これには驚いた。鉄筋5階建て、全室個室で介護ベッドにエアコン、洗面台、冷蔵庫、テレビ付きの5畳弱。もちろん食事付き。娯楽室に浴室。そして屋上には小さな礼拝堂。扉の外の山谷には、違和感を覚えるほどの天国だ。

「終のすみ家だからこそ、生きることはいいなあと感じてほしい、その思いを空間に込めたのです」と山本さん。そして館内にはスタッフたちの醸し出す、何ともいえない温かな空気が流れている。

地元の反応はいかがですか、と尋ねると、

「悪くないです。何やら周りの人が良い誤解をしてくれていますね」と山本さんは笑う。町の住民にとっては「道端に転がっている人を収容してくれる」。ドヤも「寝たきりの人の世話は大変、まして亡くなられても……」。そして山谷の男たちには「自分たちの先輩が入り、やがて自分もお世話になる場所」という安心感をもたらす。

もっとも山本さんは最初、山谷に建てる気は毛頭なかった。当初はよそで賃貸物件を探したが、「ホームレスを看取る」ための家など貸してくれるわけがない。ならば土地を購入して、と思いきや、住民運動が起こって断念した。たまたま不動産屋の紹介で、売れ残っていた山谷のど真ん中の土地を購入、現在に至ったわけだ。思えばこの町こそが入居者の第二の故郷、一番しっくり来る。

そしてここは余生を過ごすための家庭。まだ体調が悪くない人には自炊可能な個室の別棟もある。

「お酒や食事制限や煙草も、病院のようには制限しません。少しは楽しんでもいいかなって（笑）」と美恵さん。家族ならそんなもんだ。

医療行為は、医師による往診や毎日のように通ってくれる訪問看護師に委ねられている。

山谷には「訪問看護ステーションコスモス」という、心強いご近所さんがいるのだ。ここは看護師である山下真実子さんが、山谷地区のボランティアをするならこの地で生業を、と7年前に開い

「自分の墓も戒名も用意したよ」と、先祖の位牌を祭った部屋に案内してくれた。遠洋マグロ漁船に乗るなど相当数の職業経験者だ。

屋上には小さな礼拝堂がある。月に1度礼拝をするが、僧侶のスタッフが仏教式に施餓鬼供養もする。宗教の壁より心の平安重視だ。

礼拝堂の扉を開けると、正面の祭壇や棚に11人分の骨壺。毎年11月のキリスト教の「諸聖人と死者の月」にまとめて埋葬するそうだ。

た。スタッフの看護師たちも、海外の難民支援の医療チームに参加する人もいるほどの強者揃いだ。

彼女たちはきぼうのいえの他にも、ドヤを一軒一軒訪ねては看護を施す。中には狭く不潔な部屋で悲惨な状態の病人もおり、入院やきぼうのいえを紹介することもある。ホームレス相手の医療相談や、様々なデイサービスも開いている。

「でもデイサービスに来るのは山谷の方は半分。半分は地元の普通のおばあちゃんなの。年を取ると立場なんて関係ないみたいね」と山下さんは笑う。

ベッドの上でコンクリを打つ音に耳を済ませて

「いろんな人が出入りしますよ」と山本さんの言うとおり、きぼうのいえでは朝からあっちこっちでたくさんの人が、縦横無尽に行き交っている。

介護担当のヘルパー、厨房担当、掃除担当、訪問医師、訪問看護師、ケアマネージャー、ボランティア、お見舞い、そして入居者……。

私たちも、何人かの方について仕事ぶりを見せていただいた。笑顔でおしめを手早く取り替えるケアワーカーさんが、部屋を出るとふと呟いた。

「この方も、余命半年と言われたんだけど、もう2年以上ここで元気に過ごされているのよ」

バナナを買いたいという糖尿病患者の買い物に付き添うスタッフは「1日1本だけね」と優しく諭す。言いしれぬ温かさがそこにある。買い物から帰るとおじさんは、自室のベッドにもたれてインシュリン注射を自分の腹に突き立てながら、

「ん？　どこかでコンクリを打ってるな。ほら、ゴォーって音がしてるよ」と目を輝かせた。

山谷の町を歩くと、おじさんたちが工事現場をぐるりと取り囲み、現場談議に花が咲く様子を見かける。彼らに最も身近で興味深い職場なのだ。

昼下がりの娯楽室を覗くと暖かな日差しの中、立派な革張りソファに身を委ねて、午睡するおじさんがいた。失礼ながら私の脳裏にはこんな言葉が浮かんだ。「野生動物は腹を見せて眠らない」。

おじさん自身、こんなひとときが人生のどこかに待ち受けていることなど、想像だにしなかったに違いない。ここは「心から安心していられる場所」なのだろうと、その姿を見て思った。

館内をブラブラするうち、私は屋上に上がって、何げなく礼拝堂の扉を開けた。目の前の台上に真っ白い布で包まれた骨壺が並んでいた。

おじさんたちの次の場面がそこにあった。

身も心も肝っ玉母さんそのものの治子さんは、赤いエプロン姿のケアワーカーだ。明るくていつも笑顔で、昼食後は皆の部屋を回って話し相手をし、お天気がよければ入居者を散歩に連れ出す。近くにいるだけで思わず嬉しくなる人だ。

私たちをいろいろ案内してくれた後、治子さんは例の礼拝堂に入り、サングラスを載せて「おれ、ケンゾウ」と書かれた名札が貼られた骨壺を見せてくれた。「もう可愛かったのよ。楽しい性格でねえ、みーんなの人気者。人工透析のための通院に毎回付き添っていたから、情が移ってね」と、彼女は骨壺を愛おしそうに撫ぜた。

ケンゾウさんの最後に居合わせたのは、たまたま治子さん1人だった。怪我による失血。

「もう顔から血の気が引いているのに死ねないの。ペースメーカーが埋め込んであったから、心臓が止まらないのよ」と治子さん。医師はペースメーカー停止の決断を、彼女に委ねたのだった。

一人じゃなかったことを実感して旅立ってほしい

翌日は午後2時から、ボランティアスタッフによるティータイムのサービスが開かれた。

カラオケ上手なおじさんは、ボランティアの女性と銀座の恋の物語をデュエットで歌ってご満悦。3時からは禁煙解除なので入居者や、以前ここに住んだ経験のある女性らが集って、賑やかなミニティーパーティとなった。そこに1人のボランテ

糖尿病を患う丸角さんは1日2回、自分で腹にインシュリン注射する。「もう10年目だから慣れてる」。絵を描くのが好きなおじさん。

訪問診療に訪れた内科医の堀先生はドヤへも出掛ける。「どんな場面でも対応できるように」白衣ではなくジーンズにラガーシャツ姿。

毎週木曜日の午後は、娯楽室でティータイム。ボランティアの女性たちがコーヒーと紅茶、それにお菓子をふるまう。部屋への出前もする。カラオケを楽しむ人も。

ィア女性がカラオケの歌詞ブックを取りに来た。

「寺川さんね、私が美空ひばりを唱うと、一緒に唇を動かすの。好きなのよね、歌が」

寺川さんはだいぶ容態が悪いのだと、昨日訪問看護師がスタッフに申し送りをした入居者だった。

ここではその間際まで、誰かがずっとそばにいる。看取りの瞬間に必ずしも居合わせることはできなくても、一人で生きてきたのではないことを実感して旅立ってほしいと願っているからだ。

実を申せば、私自身、病院に生死を依存することに抵抗を感じて子どもは家で産み、実父を家で見送った。いや看取ったなんて偉そうなものではない。糖尿病で入退院を繰り返す父に、日頃から「家で死になよ」と言って介護の覚悟を決めていたら、退院して10日後に本当に昼寝から目覚めなかったというあっけない体験だ。病院では寝たきり病人扱いだったのに、2日前には公園で梅の花見をし、間際まで自分で風呂に入り、トイレに行き、昼食も母と摂ったばかりであった。

でも残された者たちには言いしれぬ充足感があった。家族はなぜかまるで大旅行に出掛ける父の準備を手伝うかのような、並々ならぬ明るい興奮の中にあったことを覚えている。きぼうのいえに、それと似た独特の高揚感を感じた。

このホスピスの入居者は、必ずしも山谷育ちの男ばかりではない。3割強はそれまで普通に街でアパート住まいなどをしていた独居高齢者。高齢を理由に賃貸契約の更新をしてもらえなかったり、入院を機にアパートを引き払ってしまったり。つまり私たちの近未来に直結した人たちなのである。

「でも、こういった趣旨の施設は、おそらく日本ではまだ他にないのです」と山本さんは言った。

一層の高齢化社会を迎える日本。新しい施設の在り方を模索する、行政の視察も多いという。

道で行き倒れた人を救いたいという一心で創り上げたこの家は、図らずもこの国で暮らす多くの人の「きぼうのいえ」となるのかもしれない。

山本雅基さん(43)と美恵さん(48)。ボランティア精神だけじゃなく、こんな大施設を実現して運営してしまうのには脱帽だ。雅基さんは今年春、『東京のドヤ街・山谷でホスピス始めました。―「きぼうのいえ」の無謀な試み』(実業之日本社)という本も出した。

山谷という住所はない。南千住と浅草に挟まれた、簡易旅館(ドヤ)の多い地域を指す。『きぼうのいえ』(台東区清川2-29-12 ☎03・3875・7523 http://www.kibounoie.info/)は泪橋交差点の近くにある。